

# 幻の大坂遷都

守口市浜町に「盛泉寺」があります。明治天皇が大坂行幸の際、内侍所すなわち賢所(皇位の象徴である三種の神器の一つ八咫鏡を祀る場所)となりました。賢所は高さがあり、これまでの寺の門では入らなかったため、新たに作られた門「塀重門」が今も貴重な史跡として残っています。

その後江戸城は皇居と定められ、新政府は東京に移り、明治政府が誕生しました。

こうしたさまざまな遷都にまつわる混乱期中、天皇の象徴である賢所が置かれた守口宿は、一日首都の役割を果たし、大坂遷都は幻となりました。

近年、慶応4年に帝室臨時編集局がまとめた「大坂行幸懸記録」が盛泉寺から発見され、克明に記された当時の大坂行幸に関する貴重な記録がよみがえってきました。



盛泉寺正門および塀重門(右)



盛泉寺内侍所の碑



大阪府からの書状(上)  
盛泉寺内侍所となった貴重な資料(下)



慶応4年に東京臨時帝室編集局より盛泉寺に届いた「大坂行幸懸記録」

## 貴重な史料は守口市の宝～(財)守口文庫～

守口の歴史を語る時、必ずといって登場するのは(財)守口文庫の存在です。財団設立は大変な作業でしたが、父からの使命感でこまめやってきました。父の遺志を實現できたことは、大きな宝です。ね(財)守口文庫の理事長・菊田芳さんが語ってくれました。江戸時代、宿駅、守口宿の代々町役人・宿役人を勤めてきた菊田家は、特に幕末、明治維新のころに庄屋・宿取締役を勤めた菊田太瓶義方が残した貴重な史料の保存と継承に、故菊田太郎氏(大阪経済大学教授)は河内の郷土史家としても活躍されてきました。守口市の名誉市民直原玉青画伯の守口宿の風景画の保管に貢献されましたが、守口文庫の財団化の実現半ばに逝去され、その意志を継いで長女・故夏子氏と現理事長の菊田芳さんの尽力によって、昭和55年9



(財)守口文庫理事長・菊田芳さん



慶応4年明治天皇初の大坂行幸は、1659人の一行が守口宿に一泊したとされています。

月に宿願の財団が実現しました。(財)守口文庫には、約1万点の江戸時代の文献、歴史資料、古文書が残され、現在は一般財団として守口文庫の維持と貴重な歴史資料を整備、公開されています。守口市の語り部がだんだんといなくなり、間違った歴史が伝わらないようにしてほしいと語る菊田さんの言葉に、歴史を伝承する重さを感じます。史料は歴史を語ります。歴史を大切に守ってきた人々の想いが、(財)守口文庫には詰まっています。

# 宿場の軌跡をたどる

～幕末維新の歴史舞台になった守口～

守口市竜田通と浜町の南角に「難宗寺」があります。慶応3年(1867年)第15代将軍・徳川慶喜が大政奉還し、明治新政府が成立しましたが、慶応4年(1868年)に旧幕府軍と新政府軍の「鳥羽伏見の戦い(戊辰戦争)」が起こり、旧幕府軍は敗れ大坂城へ逃れました。

新政府は明治天皇の権威を国民に示すため、旧幕府を討つことを名目に大坂遷都を建白しましたが、反対もあり、孝明天皇崩御後、初めての大坂行幸(行幸とは天皇が外出されること)をしました。その途中で「難宗寺」に宿泊され行在所(天皇が外出した時の仮の御所)となりました。

また、大正天皇も皇太子の時に宿泊されています。



明治天皇が一泊された時の「玉座」が大切に保存されています。錦の御旗(天皇軍の旗)レプリカ(復元)・難宗寺所蔵



明治天皇および大正天皇がお湯殿でご利用されたもの



難宗寺の北西の角に「すぐ守口街道」「すぐ京街道」と書かれた道標や記念碑があります。



難宗寺行在所の碑



数年前まで現存していた大塩書院(大塩平八郎の講議所、守口市竜田通)、白井孝右衛門末えいの白井孝彦氏より提供



大塩書院跡の碑と瓦



大塩平八郎肖像画 (財)守口文庫所蔵

明治維新の30年前、天保8年(1837年)に起きた「大塩平八郎の乱」。天保の大飢饉で苦しむ民衆の救済と、極端な米不足の中、幕府を訴えるために、弟子や武士・農民らを率いて挙兵した歴史的にも有名な乱です。大塩は、大坂奉行の元与力つまり幕府の役人であったため、幕府を揺がしました。しかし、密告もあり事件はわずか半日で終結したといわれています。守口の富豪・白井孝右衛門は、

早くから師弟の間柄で経済的にも援助をしていた関係から、この地に守口の隠居所を大塩に提供しました。そこで大塩は、役人であるとともに陽明学者でもあったため、近隣の農民たちにも講義を行っていました。

## 激動の時代 身を投じた大塩平八郎